

オショロコマ

Salvelinus malma malma

サケ科



オショロコマ

名前の由来

アイヌ語のオソロコマに由来する（十勝地方では別の呼び名）。オソロコマとは「尻・それによって・泳ぐ」を意味するという。漢字名：(なし)

特定種

国レッドリスト（2007）…絶滅危惧Ⅱ類（VU）

北海道レッドデータ…希少種（R）

形態的特徴

全長20cm。一般的に体側は褐色で背側は黒褐色を帯び、腹部は白。体側に5～10個のパーマークと、瞳孔と同大かそれより小さい赤色の斑点が散在。

降海個体では、降海時にパーマークは消え、赤点が淡紅色に変わるが、河川残留個体は生涯パーマークを持つ。

脂ビレをもつ。脂ビレとはサケ科、キュウリウオ科《アユの仲間も含む》、熱帯魚のカラシン亜目にのみ見られる、背ビレと尾ビレの間のヒレ。条《スジ》がない。



オショロコマ。朱色の点が存在する

類似種と見分け方

アメマス。

オショロコマには体側の朱紅点があるのに対し、アメマスにはない。



類似種、アメマス

一生

産卵期は10～11月下旬で、ふ化は1～2月頃。稚魚は流れの緩やかな岸の水たまりや浅瀬などで生息し、大きくなるに従って深い淵に移っていく。日本（北海道）では大部分が淡水域に一生生息するという。

多くの場合、オスは満2年（12cm）で、メスは満3年（13cm）で成熟する。産卵後も死なず、6年程度生きるという。

生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
産卵期										■	■	
孵化期	■	■	■									
幼魚期	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
成魚期			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

オスは満2歳、メスは満3歳で成熟

産卵

6歳程度まで生きる

生息環境・分布

北海道に分布するオショロコマはほとんどが淡水域で一生を過ごす。低水温を好む。

夏には川の淵から瀬にかけて生息する。岩や小石のすき間を隠れ場所としてひそむ。

稚魚期には岸辺の水たまりや浅瀬などで生息。

アメマス、ヤマメより上流域に棲むことが多い。

分布：沿海州、サハリン、カムチャッカ半島、北米大陸の

アラスカ、カリフォルニア北部に及ぶ太平洋の北部一帯に分布する。

国内では北海道のみに分布し、道南の狩場山以北、道央の石狩山地、日高山脈、道東の知床半島のような山岳地帯に生息する。

十勝では、上流域（溪流）に分布が局限される。大きなダムがある川ではダムの上流側に多い。

食性

水生昆虫や陸生昆虫を中心に甲殻類、クモ類など。

繁殖生態

産卵期は10～11月、産卵期になると、腹部が赤や橙色に変わる。メスとそれより大きなオスがつがいとなることが多い。

メスが砂礫のすき間に産卵床を作り、産卵する。放卵の際

1～数尾のオスが産卵床内に突進して放精することが多い。産卵数は体長10～26cmで76(50)～219粒、卵は球形で約4.5mm、1～3月にふ化。

産卵後も死亡することなく、翌年再び産卵する。

他生物との関わり

魚食性の動物の餌になると思われる。アメマス、ヤマメより上流域に棲む。

アメマスと共存するところではアメマスが水面近く、オシ

ョロコマが底近く、と棲み分けるといふ。

興味深い話

■淵に生息する場合、体の大きさによる順位があって、淵頭に最も大きな個体が位置することが多い。淵が小さい時には1尾で淵全体を占有することもあるという。

■上流にオショロコマ、下流にアメマスと分布することが多いが、同一場所に両者が混在する時は、オショロコマが底生動物を、アメマスが落下昆虫や流下昆虫を餌とする割合が高くなるという。

■降海・降湖するものは唐揚げ・塩焼きなどで美味だが、河川残留個体はあまりうまくないという。

■国外では海で回遊するものも多く、40～60cm（最大128cm）にもなり、母川回帰性も強いという。

■十勝地方のアイヌ語では「チポロケソ」と呼ばれる。

■ミヤベイイワナは、然別湖に自然陸封されたオショロコマの別亜種で、河川型（オスが多い）と降湖型（メスが多い）に分かれる。乱獲により一時絶滅の危機にあった。し

かし鹿追町を中心に、多額の費用と、道立水産孵化場をはじめとする多くの人々の熱意と協力により、個体数の回復が図られてきた。現在では、期間や釣り数など様々な規制を設けた上で遊漁を実施している。(参照：<http://www.town.shikaoui.hokkaido.jp/admin/fishing/>) 道指定の天然記念物。アイヌ語ではポンコタンクルと呼ばれる。



然別湖。
オショロコマの別亜種であるミヤベイイワナが生息する

配慮事項

産卵できる上流部の砂礫底の瀬、生息や卵の生存に必要な溶存酸素を十分に作る水の落ち込み、採餌・休息の場所となる瀬と連続した淵、水温上昇を防いで落葉や落下昆虫をもたらず水面に被さる樹木、上下流の行き来が阻害されな

いこと、水質が良好であること、などが留意すべき点だと思われる。

比較的釣りやすい魚なので、資源を枯渇させないように注意が必要。

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)
草花

(外来種)
草花

哺乳類

(鳥辺)
鳥類

(葦原・樹林)
鳥類

参考文献

「漁業生物図鑑 北のさかなたち」長澤和也・鳥澤雅 編、(株)日本海洋センター 1991

「検索入門 川と湖の魚②」川那部浩哉・水野信彦、保育社 1990
「川づくりのための魚類ガイド、北海道河川環境研究会、(財)北海道建設技術センター、2001

「山溪カラー名鑑 日本の淡水魚」川那部浩哉・水野信彦 編・監

修、山と溪谷社 1989

「北海道の淡水魚」稗田一俊、北海道新聞社 1984

「川の生物図典」奥田重俊・柴田敏隆・島谷幸広・水野信彦・矢島稔・山岸哲 監修、(財)リバーフロント整備センター編集、山海堂、1996